

〔研究ノート〕

中国のことばと文化・社会（三）

文 楚 雄*

目 次

第2章 漢字啓蒙教育と文化の伝承

第1節 漢字啓蒙教育による中国文化の伝承

第2節 《三字経》の漢字啓蒙教育と文化の伝承（以上、前号）

第3節 《千字文》の漢字啓蒙教育と儒教文化の伝承

- 1, 《千字文》の構成
- 2, 《千字文》における歴史と歴史人物
- 3, 《千字文》における儒教的な理念・道徳・行動基準
- 4, 《千字文》における儒教的な人間関係
- 5, 《千字文》における儒教的な立居振舞
- 6, 《千字文》における世界観と宗教思想
- 7, 《千字文》における都
- 8, 《千字文》における自然現象
- 9, 《千字文》における生産活動
- 10, 《千字文》のまとめ（以上、本号）

第3節 《千字文》の漢字啓蒙教育と儒教文化の伝承

この節では漢字啓蒙教育に最もよく使われてきたもう一つの教材《千字文》を取り上げる。

《千字文》は1500年ぐらい前に作られ、第2節に取り上げた《三字経》とともに、中国最高

の漢字啓蒙教育の教材とされている。第1節と第2節で考察してきたように漢字啓蒙教育では如何に短時間で最小限の漢字を習得させるのが大きな課題である。《千字文》は児童たちに負担を感じさせずに自然に漢字を覚えさせることができるのが実に素晴らしい。しかし、この構造的な素晴らしさは本研究の目的ではない。本研究のねらいは漢字啓蒙教育教材の内容的なすばらしさにある。《千字文》などの漢字啓蒙教育の教材は児童たちに漢字を習得させると同時に、限られた字数で最大限の知識や中国の文化をも教えているのである。中国の歴史や儒教思想、価値観、道徳などを植付け、伝承させているのである。このことこそが本研究のねらいである。従って、本研究は漢字啓蒙教育が児童たちにどんな文化や思想を教えているのか、どんな文化を伝承させているのかを明らかにしていきたい。この第3節ではこのような視点で《千字文》を取り上げる。《千字文》はわずか一千字しかない構造となっているが、この限られた字数でどんな文化や思想を教え、どんなものを伝承させているのかを考察していきたい。この考察を通じて、《千字文》は、第2節に取り上げた《三字経》と同様に、決して漢字の習得だけに役割を果たしているのではなく、中国文化の植付けや伝承にも大きな役割を果たしているのであるということを明らかにしていきたい。

* 立命館大学産業社会学部教授

中国文化の伝承が漢字啓蒙教育の段階から始まる。

1. 《千字文》の構成

《千字文》は四文字で一小句、八文字で一大句の構造となっている。全部で125大句で、ちょうど一千字となっている。故に《千字文》と名づけられたのである。《千字文》は重複する文字がなく、韻も踏んでいて、読みやすく覚えやすい構造となっている。早くから漢字啓蒙教育の教材や習字の手本として使われてきた。

《千字文》は梁時代の周興嗣（470 - 521）が作成したと言われている。周興嗣は字が思纂、河南省項城県を本籍とするが、家は代々安徽省当塗県に住んだ。南斉時代のとき秀才に挙げられ、桂陽郡丞に任ぜられた。『梁皇帝実録』、『皇徳記』、『起居注』などを著した。小川環樹の注解によれば、「13歳のとき、都（南京）に出て学問を積むこと十年余り、南斉の隆昌元年（494）秀才の資格を得て、官途についた。梁の武帝が即位した天監元年（502）『体平の賦』という韻文作品をたてまつって、大いに賞美された。それより彼の官位は昇進を続け、まず員外散騎侍郎となった。武帝はしばしば命じて種々の文を作らせた。一時地方に出たことがあるが、17年（518）再び給事中に任じられ中央に帰った。これが恐らく最後の官であろう。文集10巻のほかに、歴史などの著述百余巻があった¹⁾」という。

《千字文》は、武帝²⁾が王子達の手本用に殷鉄石に命じ、王羲之³⁾の書の中から1000字を集めて模本を作らせ、周興嗣に命じて整然とした韻文にまとめ上げさせたものだと伝えられている。小川環樹によれば、《千字文》の編纂については正史の列伝『梁書』、『南史』には記しているが、極めて簡単である。唐の李綽の『尚

書故実』には次のように記す。「梁の武帝は王子達に書を習わせるため、王羲之の筆跡から重複しない文字一千字の摸本を作らせたが、一字ずつの紙片であって、ばらばらで順序はなかった。武帝は周興嗣を呼び出し、これを韻文になるように考えてくれと言った。そこで周興嗣は一晩かかってこの一千字を用いた整然たる韻文一篇を作り、武帝にたてまつったが、その苦心のため髪の毛が真っ白になった⁴⁾」という。

一方、《千字文》は、周興嗣が韻文に改編する前にすでに整えたものが存在していた説もある。小川環樹の注解では、敦煌出土の写本『雑抄』には鐘繇（151 - 230）の撰、李暹の注、周興嗣次韻と注している。日本に伝わった古写本弘安本の序文にも、千字文は魏の太尉鐘繇が作ったのだと書いてある。序文には更に「鐘繇の筆跡は西晋の末まで洛陽の都の宮中に秘蔵されていたが、いわゆる永嘉の乱で、都が今の南京に移った時に、それらの典籍を運ばれていく途中、暑さと雨に冒され、ぼろぼろになってしまった。そこで東晋の元帝は王羲之に命じ、千字文を別に書き写させたが、破損のため文が続かず、韻も合わなくなっていた。梁の武帝の時、周興嗣に命じ、文意が一貫するように、また韻も合うように、整えさせた⁵⁾」と紹介している。

このように《千字文》の成立時期については学者の意見が分かれているが、周興嗣によって最終的に韻文にまとめ上げられたのはどの説も一致している。

《千字文》は漢字習得の教材や習字の手本として中国だけでなく、朝鮮、日本などの漢字文化圏にも広く用いられていた。また、近世には英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ラテン語などにも翻訳された。《千字文》が日本に伝わってきたのは西暦4 - 5世紀頃だといわ

れている。4世紀中頃、朝鮮半島の百済の王仁(わに)博士⁶⁾が応神天皇に招かれ日本に来た時に、『論語』10巻、『千字文』1巻をもたらしてきたと伝えられている。『古事記』の記載はこの言い伝えの根拠とされている。即ち、応神記に、「名和邇吉師、即論語十巻、千字文一巻、并十一巻、付是人即貢進」とあるのが、それである。『日本書紀』巻10によると、応神天皇の16年の事であった。

しかし、記紀の記述に記している《千字文》の最初の日本伝来について疑問視する見方が強い。小川環樹の注解では、「古史の紀年を無条件に信ずれば、応神16年は西暦285年、西晋の武帝の太康6年にあたる。その年は《千字文》の作者周興嗣の死より260年以上前になる。この食い違いはどう考えるべきか。江戸末期以来、二つの解釈があった。一つは梁の武帝より以前から《千字文》の原型が存在した説、即ち尾形氏の言う「古千字文」の実在を信ずる立場を取ることである。もう一つは《千字文》と記したのは『古事記』の編者の誤りであって、本当はもっと古い中国で作られた同類の字書『急就篇』または『倉頡篇』が渡来したのだとする説である。後の説は明治の学者の間で相当有力であった。しかし、実は簡単なことで、わが古史の紀年が故意に初期の天皇の治世を引き延ばした結果、年代の大きく食い違いが起こったのであった⁷⁾」と論じている。

一方、《千字文》などの漢籍を日本に持ち込んできた王仁については、生誕地韓国全羅南道靈岩郡のホームページでは次のように紹介している。

「王仁博士は百済14代近仇首王(西紀375～384年)代に全羅南道靈岩郡郡西面位東鳩林里聖基洞で誕生した。8才のとき月出山ジュジ峰

の麓にあるムンサン齋に入門し儒学と経典を修学した。文章にすぐれ、18才で五経博士に登用された。百済17代阿華王の時に日本の応神天皇の招請を受けて靈岩の上台浦から船に乗って日本に行ったと口伝されている。……王仁は論語10巻と千字文1巻を持って陶工、冶工、瓦工など多くの技術者達と共に渡来し、……日本社会の政治経済と文化芸術の花を咲かせた。王仁博士の墓地は日本の大阪府枚方市にあり、1938年5月大阪府史跡第13号に指定された。王仁博士の生誕地である靈岩郡郡西面東鳩林聖基洞は王仁博士の遺跡址を浄化して位牌と影幀を奉安し毎年4月9日に王仁博士追慕祭を行っている⁸⁾。」

上述のように《千字文》は成立してから中国に広く使われていたばかりでなく、早くも漢字文化圏の朝鮮、日本などにも伝わってきたのである。これは《千字文》の構造や内容がいかに優れているかを物語っている。しかし、本節は《千字文》の構造的な良さを論じるものではなく、《千字文》の内容について分析していくこととなる。《千字文》がどんな文化、思想、価値観、歴史などを植付け、伝承させているのかを見ていきたいのである。これを通じて、中国の文化や思想などの伝承において、《千字文》がどんな役割を果たしているかを明らかにしていく。

2. 《千字文》における歴史と歴史人物

《千字文》では、中国の歴史及び歴史上の有名な人物などを数多く紹介している。

(1)、名君主や高官の治世

《千字文》では、歴史上の名君主や高官たちの治世手法及びその当時の天下太平の状況などを伝えている。

1. 龍師火帝、鳥官人皇⁹⁾。

- （伏羲氏は官に龍の名を付けたため龍師と呼ばれ、神農氏は官に火の名を付けたため火帝と呼ばれ、少昊氏は官に鳥の名を付けたため鳥官と呼ばれた。古代には天皇、地皇、人皇がいた¹⁰。）
2. 推位讓国，有虞陶唐¹¹。
（位を賢人に譲り，国を臣下に譲ったのは帝の虞と帝の陶唐であった。）
 3. 吊民伐罪，周發殷湯。
（民を慰め，罪人を討伐したのは周王朝の武王周發と殷王朝の湯王であった。）
 4. 坐朝問道，垂拱平章。
（古代の君主は朝廷に座って，臣に治国の道を問い求め，何をしなくても国が治まり，民が安らぎであった。）
 5. 愛育黎首，臣伏戎羌。
（古代の君主は民衆を愛しみ育み，戎人や羌人などの少数民族を家来として服従させた。）
 6. 籛溪伊尹，佐時阿衡¹²。
（籛溪の姜大公や阿衡の称号と呼ばれた伊尹は天子の治国を補佐した。）
 7. 奄宅曲阜，微旦孰營¹³。
（奄宅曲阜という国は周公旦がいなければ，誰が管理できるのだろうか。）
 8. 桓公匡合，濟弱扶傾¹⁴。
（齊の桓公は天下の乱を治めるために諸侯を集めて，弱い国を助け，傾いた政権を持ち直した。）
 9. 綺迴漢惠，説感武丁¹⁵。
（綺里回という隠遁者は漢の太子劉盈を太子の地位に戻した。傳説という宰相は殷の高祖武丁帝を助けて感動させた。）
 10. 俊义密勿，多士実寧。
（才能の優れた人が勤勉に働き，多くの
- 人材がいて，天下はとても安寧となった。）
11. 晋楚更霸，趙魏困横¹⁶。
（春秋時代の晋の文公と楚の莊王はかわるがわる覇者となり，戦国時代の趙国と魏国は連衡の策に苦しめられた。）
 12. 仮途滅虢，踐土会盟¹⁷。
（晋の献公は虞の国から道を借りて虢の国を滅ぼし，晋の文公は諸侯を踐土に集めて，誓いを結んだ。）
 13. 何遵約法，韓弊煩刑¹⁸。
（籛何は漢高祖の精神を遵守して簡約の刑法を制定した。韓非は煩雑な刑罰を定めて治世に失敗した。）
 14. 起翦頗牧，用軍最精¹⁹。
（白起，王翦，廉頗，李牧などの名將は兵法に精通し，兵を使う時にはとても巧みであった。）
 15. 宣威沙漠，馳譽丹青。
（古代の名將軍達の威勢は辺境の砂漠まで及ぼし，その姿が丹青の絵に描かれ，その荣誉が後世に伝えられた。）
 16. 九州禹跡，百郡秦并²⁰。
（禹王の足跡が九つの州に及んだ。百郡の大地は秦によって統一された。）
 17. 遐邇壹体，率賓歸王。
（遠い処も近い処も一つに結びあい，連れ立ってやってきて王に歸順する。）
 18. 鳴鳳在樹，白駒食場。
（天下が太平で，鳳凰が木の上で鳴き，白い駒は畑の中で草を食べる。）
 19. 化被草木，頼及万方。
（天子の仁徳教化は草木にも及び，王化は万方の国々にあまねく及ぶ。）
- 1 ~ 19が示しているように，《千字文》で

はかなりの紙面を使って中国の歴史や歴史上の名君主、名高官、名将軍などの治世法や天下繁栄の状況などを伝えて、子供たちに歴史を学ばせる。

(2), 学者・名人・美人

《千字文》では、歴史上の学者・名人・美人などの人物を紹介している。

20. 始制文字，乃服衣裳²¹。

(蒼頡が始めて文字を造り、累祖が始めて服を造った。)

21. 恬筆倫紙，鈞巧任鈞²²。

(蒙恬は筆を作り、蔡倫は紙を発明した。馬鈞の製造技術は巧みであり、任公子の鈞は上手であった。)

22. 布射遼丸，嵇琴阮嘯²³。

(呂布は弓の名人であり、宜遼は弾丸の名人である。嵇康は琴が上手く、阮籍は笛を吹くのが上手である。)

23. 釈紛利俗，並皆佳妙。

(紛れを解き、民衆に利益をもたらす人はすべて素晴らしい人である。)

24. 毛施淑姿，工鬢妍咲²⁴。

(毛嬙や西施は容姿が美しく、眉を鬢める時も笑う時も美しい。)

20～24が示しているように、《千字文》では学問、技術、技能、発明などの名人を伝えて、子供達に学問への興味関心を喚起させるようにしている。容姿の美しい女性も伝えている。

3. 《千字文》における儒教的な理念・道徳・行動基準

(1), 忠誠・親孝行の精神

25. 資父事君，曰嚴与敬。

(父に仕える時も君主に仕える時も尊厳や敬愛の心を持たなければならない。)

26. 孝当竭力，忠則尽命。

(親への孝行には全力を尽くし、君主への忠誠には命を尽くす。)

27. 臨深履薄，夙興温清。

(君主に仕える時には、深淵に臨むように、薄氷を踏むように恐れ慎む。親に仕える時には、朝早く起きて、冬は暖かく夏は涼しく感じさせるように用意する。)

25～27が示しているように、《千字文》では親孝行の精神や君主への忠誠心を子供達に教育している。

(2), 君主・賢人・聖人の徳性

28. 貽厥嘉猷，勉其祗植。

(君子は良い意見を残し、それを取り入れて事業を成功させるように努力するのである。)

29. 易輟攸畏，属耳垣牆。

(君子は軽率な発言を謹み、垣壁の外に耳を立てて用心すべし。)

30. 景行維賢，剋念作聖。

(立派な行動をすれば賢人となり、よく思考すれば聖人となる。)

31. 庶幾中庸，勞謙謹勅。

(賢人は中庸、勤勞、謙虚、謹慎、戒めの精神を追求するのである。)

32. 孟軻敦素，史魚秉直²⁵。

(孟子は素直な精神を崇め、史魚は正直な心を大切にした。)

33. 墨悲糸染，詩讀羔羊²⁶。

(墨子は白い絹糸が色に染められるのを見て悲しんだ。『詩経』では羊の純正の色を讃えている。)

28～33が示しているように、《千字文》では古代の君主・賢人・聖人の徳性を紹介して、子供達に学ぶように教育している。

(3), 学問の修行

34. 耽読斲市，寓目囊箱²⁷⁾。
 （漢時代の王充は読書に耽り，市に遊ぶ時でも本を探し求め，目を寄せる処は本箱ばかりであった。）
35. 尺璧非宝，寸陰是競。
 （一尺の玉であってもそれを宝物とせず，一瞬の光陰こそが競うべきものである。）
36. 空谷伝声，虚堂習聴。
 （広い谷では声が遠くまで伝わる。静かな部屋でその声を聴いて学ぶ。）
37. 孤陋寡聞，愚蒙等誥。
 （学識が浅く見聞が狭い場合は，愚かて物を知らないと貶される。）
- 34～37が示しているように，《千字文》では修行の手本などを紹介して学問修行の重要性を訴えている。
- (4), 徳性の修行
38. 似蘭斯馨，如松之盛。
 （蘭の香りのように，松の栄えのように自分の徳性を養う。）
39. 徳建名立，形端表正。
 （徳行の修行を続ければ，名声も上がり，形や表が端正であれば影も正しくなる。）
40. 知過必改，得能莫忘。
 （過ちが分れば必ず改め，知識を学んだら忘れることなかれ。）
41. 罔談彼短，靡恃己長。
 （他人の短所を言い立てるな。自分の長所を自慢するな）
42. 省躬讜誠，寵増抗極。
 （常に自分自身を反省して自戒を行う。寵愛が増えても傲慢さが増えてはいけない。）
43. 節義廉退，顛沛匪虧。
 （節操，正義，清廉，謙虚は挫折の時であつても無くしてはならない。）
44. 女慕貞潔，男效才良。
 （女は貞潔を慕い，男は才能の優れた賢人に学ぶ。）
45. 誅斬賊盜，捕獲叛亡。
 （盗賊の者を切り殺し，謀反や逃亡の者を捕獲する。）
- 37～45が示しているように，《千字文》では謙虚，反省，自戒などの身につけるべき徳性を示して教育している。
- (5), 信用や名声の大切さ
46. 信使可覆，器欲難量。
 （信用や約束は守るべし，度量は量れないほど大きくすべし。）
47. 篤初誠美，慎終宜令。
 （事の始めを重視するのは誠に良いことであるが，終わりも慎まなければならない。このことこそが良いことなのである。）
48. 栄業所基，藉甚無竟。
 （終始一貫の精神は偉大な事業をなす時の基礎であり，名声にも甚だしく影響するものである。）
49. 存以甘棠，去而益詠²⁸⁾。
 （山梨の木を残して周召公を偲び，更に詩を詠じて彼を賛美する。）
- 44～49が示しているように，《千字文》では信用などの重要性を教えている。
- (6), 官途への憧れ
50. 学優登仕，撰職従政。
 （学業が優れば仕官となれる。職務を取り政治を行う。）
51. 堅持雅操，好爵自縻。
 （高雅な操を堅持しておけば，高い官位が自然にやってくる。）

50～51が示しているように、《千字文》では官途への出世を勧めている。

(7), 官途からの引退

52. 殆辱近恥, 林壑幸即。

(侮辱などの禍が近づいてきたら、直ちに林や山に隠居すべし。)

53. 両疏見機, 解組誰逼²⁹⁾。

(漢時代の太子の傳を勤めた疏広と疏受は時機を見定めて、冠の組紐を解いて辞職した。二人を詰問する人は誰もいなかった。)

54. 索居閑処, 沈黙寂寥。

(閑かな処に住みつき、沈黙してのんびりと暮らす。)

55. 求古尋論, 散慮逍遙。

(書籍に古の賢人たちの哲理を探し求め、憂えを晴らしてのびのびと暮らす。)

51～55が示しているように、《千字文》では禍がやってきそうになった時には引退して身を守るように教育している。

4. 《千字文》における儒教的な人間関係

(1), 主従・上下関係

56. 楽殊貴賤, 礼別尊卑。

(音楽は貴賤によって内容が異なり、礼節は尊卑によって形式が区別する。)

57. 外受傳訓, 入奉母儀。

(外では師匠の訓えを受ける。家の中では母親の訓えを守る。)

56～57が示しているように、《千字文》では主従や上下の関係について説明している。

(2), 夫妻・男女関係

58. 上和下睦, 夫唱婦隨。

(上の者が親和であれば、下の者は睦まじくなる。夫が唱えるならば、妻はそれに従う。)

59. 妾御績紡, 侍巾帷房。

(婦人は昼間には糸を紡ぎ、夜には帷の部屋で主人に仕える。)

58～59が示しているように、《千字文》では妻が夫に従う思想を教えている。

(3), 家族・親戚関係

60. 嫡後嗣統, 祭祀蒸嘗。

(嫡子は父母の後を継ぎ、冬祭りの蒸や秋祭りの嘗を嘗む。)

61. 諸姑伯叔, 猶子比兒。

(叔父達や叔母達にも尊敬の心を尽くし、兄弟姉妹達の子を自分の子のように愛する。)

62. 孔懷兄弟, 同氣連枝。

(兄弟は互いに助け合わなければならない。同じ気から生まれ、同じ幹から生えてきた枝のようなものだ。)

63. 親戚故旧, 老少異糧。

(親戚縁者や旧友と親しく付き合い、老人や子供が来たらそれぞれ違う食べ物で持て成す。)

60～63が示しているように、《千字文》では家族や親戚の人々を愛しなければならないことを教えている。

(4), 友人関係

64. 交友投分, 切磨箴規。

(交友には気が合わなければならない。互いに磨きあい、互いに戒め合わなければならない。)

65. 仁慈隱惻, 造次弗離。

(慈しむ心や惻隱の情けは他人の緊急時には無くしてはいけない。)

64～65が示しているように、《千字文》では友人関係の基準を示している。

5. 《千字文》における儒教的な立居振舞

《千字文》では普段の生活や人と付き合う時の立居振舞や注意点などを教育している。

66. 聆音察理，鑑貌辯色。

（話を聞きながらその道理を理解する。表情を見ながらその心を判断する。）

67. 容止若思，言辞安定。

（立居振舞は物を考えているように静かにし，言葉を交わす時には落ち着くようにゆっくりする。）

68. 牋牒簡要，顧答審詳。

（手紙や文書は簡潔で要領よく書き，答えは詳しく分かりやすいようにする。）

69. 矩步引領，俯仰廊廟。

（規定に合った歩き方をし，首を伸ばして姿勢を正しくする。俯いたり仰いだりする時には宮殿の決まりに従うように気をつける。）

70. 束帶矜莊，徘徊瞻眺。

（束帯して厳かに盛装し，歩き回ったり眺めたりする時にも挙止に気をつける。）

71. 稽顙再拜，悚懼恐惶。

（祭りの際には稽首して再拜し，恐れ慎む挙動で営まなければならない。）

72. 骸垢想浴，執熱願涼。

（体に垢があったら洗い落としたくなり，手に熱い物を持ったら冷やしたくなる。）

66～72が示しているように，《千字文》では人と付き合う時の立居振舞などの仕方を教えている。

6. 《千字文》における世界観と宗教思想

(1), 世界観

73. 性静情逸，心動神疲。

（気立てが落ち着く時には心が穏やかになる。心を動かして物を追う時には精神が疲れる。）

74. 守真志滿，逐物意移。

（本性を守れば志が満ち足りる。物を追い求めれば心が変わっていく。）

75. 指薪脩祐，永綏吉劬。

（薪を燃やして火を点していくように身を修めていけば，幸いが絶えることなく，永く付きまとう。）

76. 欣奏累遣，戚謝歎招。

（喜びが積もれば，悩みが消え去り，憂いが除かれれば，歓びがやってくる。）

77. 具膳餐飯，適口充腸。

（用意した料理やご飯は口に合い，腹を満たせば，それでよい。）

78. 飽飫亨宰，飢厭糟糠。

（満腹の時には美味しい物でも飽きてしまう。飢えるときにはまずい物でも美味しく食べられる。）

73～78が示しているように，《千字文》では物を求めすぎではいけないなどの世界観を教育している。

(2), 仏教や道教の思想

79. 禍因惡積，福緣善慶。

（禍は悪行の積み重ねにより起こり，幸いは善行により生まれてくるのである。）

80. 蓋此身髮，四大五常。

（そもそもわれわれ人間の身体髪膚は地・火・水・風の四大の要素から構成され，仁・義・礼・智・信の五つの徳性を備えている。）

81. 恭惟鞠養，豈敢毀傷。

（慎み敬って親の養育の恩を思えば，どうして自分の体を傷つけることができるのだろうか。）

79～81が示しているように，《千字文》では因果観念や体を大切にすることなどの仏教や道教

の思想を教えている。

7. 《千字文》における都

(1), 華やかな宮殿

82. 都邑華夏, 東西二京。

(古代の天子は華夏の大地に二つの都を作り, 東には洛陽, 西には長安を建てた。)

83. 背芒面洛, 浮渭拋涇。

(洛陽は芒山を背にし, 洛水に面している。長安は渭水に浮かび, 涇水に拋る。)

84. 宮殿盤鬱, 樓觀飛鷲。

(都には宮殿はびっしりと聳え立ち, 樓閣は色とりどりの飛鳥のように見えて人を驚かせる。)

85. 図写禽獸, 画綵仙靈。

(宮殿や樓閣には鳥や獣の絵が描かれたり, 仙人などの人物画が描かれたりしている。)

86. 丙舍傍啓, 甲帳対楹。

(正殿の両側には多くの部屋があり, 柱の間には美しい帳が懸けてある。)

87. 右通広内, 左達承明。

(右は広内殿に通じ, 左は承明殿に到る。)

88. 既集墳典, 亦聚群英。

(宮殿には墳典などの書籍を集めただけでなく, 数多くの優れた学者も集めた。)

89. 杜稟鍾隸, 漆書壁經³⁰⁾。

(杜操の草書や鍾繇の隸書もあれば, 漆で書いた文字や壁から出てきた經典もある。)

82~89が示しているように, 《千字文》では都の華麗な宮殿を紹介している。

(2), 昇殿時の帝王と高官達

90. 升階訥陞, 弁軫疑星。

(高位高官の人々は階段を登って殿内に入る。冠の玉が動いて輝き, 星かと思える。)

91. 府羅将相, 路侠槐卿。

(殿内には将軍や宰相が並び, 路の両側には公卿たちが立ち並ぶ。)

92. 高冠陪輦, 駟轂振纓。

(高い冠を被る高官達は天子の車に随行し, 轂を押して車を進め, 冠の紐を揺らす。)

93. 戸封八閤, 家給千兵。

(天子は功臣達に八閤の封戸を与えたり, 家には千人の兵卒を与えたりする。)

90~93が示しているように, 《千字文》では宮殿に入る時の帝王, 高官達の服装や立居振舞などを生き生きと紹介している。

(3), 貴族達の生活

94. 世祿侈富, 車駕肥輕。

(高官達は代々の俸禄を受けて巨万の富を持ち, 華やかな車や軽裘肥馬も備える。)

95. 肆筵設席, 鼓瑟吹笙。

(筵を敷き並べて席を設ける。琴を弾く物もいれば, 笙を吹く物もいる。)

96. 紈扇圓潔, 銀燭焯焯。

(絹の扇は丸くて清潔であり, 銀の手燭はきらきりと光り輝く。)

97. 昼眠夕寝, 藍笋象床。

(昼寝の時には青い竹の細工の寝台を使い, 夜寝入りの時には象牙で飾ったベッドを使う。)

98. 絃歌酒讌, 接杯拳觴。

(琴を弾き, 歌を歌って酒盛りをし, 杯を挙げて酒を勧め合う。)

99. 矯手頓足, 悅豫且康。

（手を上げ、足を動かして大いに楽しみ、喜び、安らぐ。）

100．策功茂実，勅碑刻銘。

（功績を詳細に書き記し，石碑を彫りつけて銘文を刻みこむ。）

94～100が示しているように，《千字文》では高官高位の人達の生活ぶりを紹介している。

8．《千字文》における自然現象

（1），宇宙や季節

101．天地玄黄，宇宙洪荒。

（天の色は黒く，地の色は黄色い。宇宙は広々で茫然としている。）

102．日月盈昃，辰宿列張。

（太陽や月は満ちたり欠けたりする。星の宿は弓を張っているように連ねる。）

103．寒来暑往，秋收冬蔵。

（寒さが去れば，暑さが来る。秋には刈り入れ，冬には貯蔵する。）

104．閏余成歳，律呂調陽。

（閏月によって一年の季節を整える。律呂によって陰陽を調節する。）

105．雲騰致雨，露結為霜。

（雲が集まって雨を降らせる。露が凝結して霜となる。）

106．年矢每催，羲暉朗曜。

（光陰が矢の如し，常に人を急き立てる。太陽の光は照らして明るく輝く。）

107．璣鏡懸幹，晦魄環照。

（星の観測器がぐるぐる回り，満月や新月が循環して照り輝く。）

101～106が示しているように，《千字文》では宇宙や一年の四季などの自然現象を教えている。

（2），名勝旧跡や景観

107．雁門紫塞，鷄田赤城³¹。

（雁門山もあれば，万里の長城もある。鷄田もあれば，赤城山もある。）

108．昆池碣石，鉅野洞庭³²。

（昆明池もあれば，碣石山もある。鉅野の沼地もあれば，洞庭湖もある。）

109．岳宗恒岱，禪主云亭³³。

（五岳の中では恒山と泰山を敬い重んじる。天子は雲雲山と亭亭山で封禪の祭祀を営む。）

110．渠荷的歴，園莽抽条。

（池の蓮は鮮やかに咲き，庭の雑草は伸び茂る。）

111．枇杷晚翠，梧桐早彫。

（枇杷は冬になっても青々とし，梧桐は早く葉を落とす。）

112．陳根委翳，落葉飄搖。

（古い根は衰え，落葉は風に吹かれて翻る。）

113．遊鶻独運，凌摩絳霄。

（のんびりと遊ぶ鳳凰は独りで飛び回り，赤い空をぐんぐんと飛び上がる。）

114．川流不息，淵澄取映。

（川は止まることがなく流れ，淵は物の影が映るほど澄んでいる。）

115．海鹹河淡，鱗潜羽翔。

（海の水は塩辛く，川の水は淡い。魚は水に潜り，鳥は空を飛ぶ。）

116．曠遠綿貌，巖岫杳冥。

（大地は広々として遠く広がり，岩の洞窟は薄暗くて奥深い。）

107～116が示しているように，《千字文》では名所旧跡や美しい自然景観などを紹介している。

9．《千字文》における生産活動

（1），農業活動

117. 治本於農，務茲稼穡。

(国を治める根本は農業を良くすることにあり，作物の植付けや刈り入れに励まなければならない。)

118. 俶載南畝，我芸黍稷。

(田んぼの耕しから始め，黍や稷を植える。)

119. 稅熟貢新，勸賞黜陟。

(熟した新しい穀物を税として納める。君主は恩賞を与え，功績ある者を昇格し，ない者を降格する。)

117～119が示しているように，《千字文》では農業生産活動を紹介している。

(2), 名産物

120. 金生麗水，玉出崑岡³⁴。

(砂金は麗水に産出し，玉は崑崙山から生まれる。)

121. 劍号巨闕，珠称夜光。

(劍は巨闕と称されるものを貴び，玉は夜光と称されるものを重んじる。)

122. 菓珍李奈，菜重芥姜。

(果物は李と和りんごを貴び，野菜は芥子菜と生姜を重んじる。)

123. 驢騾犢特，駭躍超驤。

(ロバやラバ，子牛や牡牛は驚いたら，飛び跳ねたり，駆け回ったりする。)

120～123が示しているように，《千字文》では名産物などを紹介している。

10. 《千字文》のまとめ

前述に示しているように《千字文》はおよそ1500年前に中国児童の漢字啓蒙教育のために開発した教材である。その主な目的は日常的な読み書きに必要な基礎的な漢字を児童達に覚えさせることにある。重複しない1000字の漢字で意味のある文を作り，退屈することなく面白

く覚えられる構造となっているのは実に素晴らしい。当然その中には普段あまり使わない漢字も取り入れているが，全体としては今でも日常的によく使われる漢字が圧倒的に多い。このことはこの《千字文》が漢字習得の啓蒙教材として1500年経っても衰えることなく使われてきた秘訣であると私は考える。《千字文》の構造的な良さは如何にいいかこれで分る。しかし，前述に分析したように，本論の目的は《千字文》の構造的な良し悪しについて論じたものではなく，《千字文》の内容的な良さを論じたものである。《千字文》は，わずか1000字の漢字で中国の歴史や歴史人物の治世術，或いは儒教的な人間関係や日常的な立居振舞，或いは学問の修行や儒教的な徳性の養成，或いは都の宮殿の華麗さや名所旧跡の美しさ，或いは帝王の威厳や高官達の贅沢な生活ぶり，或いは宇宙季節や美しい自然環境などを，漢字を覚えると同時に自然に児童たちに焼付け伝承させている。中国文化の伝承は漢字啓蒙教育の段階から始まったのである。漢字啓蒙教育は漢字を教えるだけのことではない。中国の文化，思想，価値観，歴史，自然風土などをも教えているのである。中国文化の伝承は漢字啓蒙教育が大きな役割を果たしているのである。

注

- 1) 『千字文』小川環樹・木田章義注解，岩波書店，1997年，P385。
- 2) 梁武帝(464 - 549)，南朝梁の創立者，502 - 549年に在位，南蘭陵(今の江蘇省常州)の出身，文学に長じる。『辞海』P1584による。
- 3) 王羲之(307? - 365?)，東晋の書家。字は逸少。右軍將軍・会稽内史。楷書・草書において古今に冠絶，その子王献之と共に二王と呼ばれる。『広辞苑』による。

- 4) 同上1) P386。
- 5) 同上1) P389。
- 6) 王仁(わに), 古代, 百済からの渡来人。漢の高祖の裔で, 応神天皇の時に来朝し, 「論語」10巻, 「千字文」1巻をもたらしたという。和邇吉師(わにきし)。『広辞苑』による。
- 7) 同上1) P400。
- 8) 韓国全羅南道靈岩郡のホームページ <http://www.wangin.org/japanese/who/who1.asp> による。
- 9) 本論に引用している『千字文』の本文は1996年新疆青少年出版社が出版したものによる。
- 10) 本論の訳文は小川環樹・木田章義注解, 岩波書店1997年刊行の『千字文』を参考にした。伏羲氏, 神農氏, 少昊氏は古代伝説上の帝王。天皇, 地皇, 人皇は古代伝説上の帝王で三皇と呼ばれる。
- 11) 帝の虞は舜帝のこと, 帝の陶唐は堯帝のこと。伝説では堯帝は位を舜に譲り, 舜帝は位を禹に譲ったという。
- 12) 磻溪は川の名前, 渭水の支流, 現在の陝西省宝鸡市の東南にある。伝説では周文王はこの磻溪で姜大公に出会った。姜大公は丞相となり, 周王朝に仕えた。『辞海』P1997, 2315による。伊尹は殷の湯王に仕えた功臣, 阿衡は伊尹の称号。
- 13) 周公旦は周王朝の文王の子, 武王の弟。周の地を治めたので周公という。武王の子の成王を助けて周王朝の政治・文化・組織を定めた。礼楽の制を創ったと言われ, 孔子が聖人として仰ぎ慕った。同上1) P211。
- 14) 齊桓公は紀元前547 - 490年在位, 管仲を起用して改革を行い, 国を強くし, 燕国, 邢国, 衛国を助けた。『辞海』P2305による。
- 15) 漢の高祖劉邦は太子劉盈を廃止して趙王如意を太子に立てようとしたところ, 張良の計略で綺里回などの四人の隠遁者を起用し, 太子劉盈の地位を保った。同上9)のP89。
- 16) 晋の文公は紀元前636 - 628年在位。楚の荘王は紀元前613 - 591年在位。
- 17) 踐土は地名, 河南省新鄭県にある。春秋時代の魯の僖公は晋の文公とともに諸侯をここに集め, 誓いをしたと伝えられている。
- 18) 蕭何(? - 紀元前193)は江蘇省の出身, 劉邦の蜂起を助けた。韓非(紀元前280 - 233)は法家の代表人物。かつて荀子に師事。韓王に法の変革を進言したが受け入れられず, 後に秦王に仕えたが, 李斯らに謀られ自殺した。『辞海』P723, P2396による。
- 19) 白起(? - 紀元前257)は陝西省の出身, 秦の將軍。王翦は生没不祥, 秦の將軍。廉頗は生没不祥, 趙の武將, 藺相如と「刎頸の交わり」を結んだ話で有名。李牧(? - 229)は趙の武將。
- 20) 禹は中国古代伝説上の聖王。夏の始祖。堯の時, 治水に功を収め, 天下を九州に分ち, 貢賦を定めた。舜の禅讓を受けて位につき, 安邑に都し, 国を夏と号した。『広辞苑』
- 21) 伝説では黄帝の妃累祖が養蚕や蚕の絹糸の取り出しを発明した。『辞海』P1338による。
- 22) 蒙恬(? - 紀元前210)は秦の始皇帝に仕えた將軍, 万里の長城を築き, 匈奴をも討って上郡に駐屯した。兔の毛を縛って筆にし, それが天下に広がった。蔡倫(? - 121)漢王朝の宦官で, 樹皮などから紙を作って和帝に献上した。馬鈞は三国時代の魏の博士・機械製造家, 羅針盤をつけた車を造った。
- 23) 呂布(? - 199)は内蒙古の出身, 弓や馬が上手い。熊宜遠は春秋時代の楚の人, 弾丸が上手いと伝えられている。『辞海』P875, P1905による。
- 24) 毛嬙は春秋時代の人, 越王の宮殿にいた美女, 西施と並称される。西施は春秋時代の人, 呉王夫差の妃, 美女として毛嬙と並称される。同上1) P339。
- 25) 史魚は春秋時代衛国の人, 名は鱮, 字は史魚。
- 26) 墨子(紀元前480 - 390)は春秋戦国時代の思想家, 墨家の祖, 兼愛説と非戦論を唱えた。その思想は『墨子』にまとめられている。
- 27) 王充(27 - 101?)は家が貧しく, 読む本がなかった。いつも洛陽の市場で本を読み, 一度読んだだけで, 暗証することができたと伝えられている。『論衡』30巻を著した。
- 28) 周公は周文王の子, 名は旦。兄の武王を助けて紂を滅ぼし, 魯に封せられた。周代の礼楽制

- 度の多くはその手に成ると伝えられている。『広辞苑』による。
- 29) 疏広は山東省の出身，前漢時代の宣帝在位期間に五年間太子太傅を務め，その甥疏受は太子少傅を務めたが，病気の理由で辞職して田舎に帰った。『辞海』P2182による。
- 30) 杜操は字が伯度，長安の出身，後漢時代の書道家。鐘繇(151 - 230)は河南省の出身，三国時代の魏の大臣，書道家。『辞海』P1515, 2055による。
- 31) 雁門は中国山西省代県の北西，句注山のこと。高山なので，北に帰る雁が飛び越えられないことから，中途に穴をうがってその通路とした俗説がある。『広辞苑』による。鷄田は突厥の住んだ西北の辺境の地名。赤城は晋安県にあった地名。同上1) P243による。
- 32) 昆池は漢の武帝が，水軍訓練のため，長安城の西に掘らせた池。『広辞苑』による。碣石は碣石山のこと，東海に面している。鉅野は山東省の北にあった大きな沼地。洞庭は湖南省・湖北省にまたがる大きな湖。同上1) P246による。
- 33) 恒岱は恒山と泰山。恒山は中国五岳の一つ，山西省北東部にあり，北岳と称されている。泰山は山東省泰安にあり，五岳の一つ，東岳と称されている。古来，天子は泰山で封禪の祭祀を行った。
- 34) 麗水は浙江省南部の川，砂金を産出すると伝えられている。崑岡はチベットと新疆ウイグル自治区の境を東西に走る大山系。

